

喜の 音をとずれ

失望暗夜に此聲あり、

なんぢらの神いひたまはく、なぐさめよ、汝等わが民をなぐさめよ、懇ろにエルサレムに語り之によばゝり告よ、その服役の期すでに終り、その咎すでに赦されたり、そのもろ／＼の罪によりてエホバの手よりうけしといふは倍したりと。

（以賽亞四十章一、二節）

婦をんな その乳兒をわすれて己おのがはらの 子こをあはれまさることあらんや、縱たゞひかれら忘るたぶることありとも我はなんぢを忘るたぶことなし、われ 掌たなかつら になんぢを彫刻きめり、なんぢの石垣いしづかはつねにわが前にあり。

（同四十九章十五、十六節）

我名を恐るおそれ汝らには義の日ひで昇あがらん、その翼ひやには醫ちからす能のうをそなへん、汝等は牢より出でし犢こうの如く躍跳あがらん。

あまつ使のつぐるを聞けよ、

“ Christ ist erstanden!

“ Freude dem Sterblichen,

“ Den Die verderblichen,

“ Schleichenden, erblichen

（馬拉基四章二節）

„Mängel umwandeln!“

キリストは既アリみがくれり、
壊クルつゝあらのよみへいいく、

世々死にあとはねり

そのよりいたりしゆのみ。

嗚呼如何なムカシ音ヨメ、余り善に過ハヤシる我ワタシを信スル能ハヤ。

Die Botschaft hört ich wol, allein nur fehlt der Glaube. — Goethe, Faust, 765

(おもいは福音カトリックを我ワタシは聞クく、然れども信仰我ワタシにモ)

此救主キリストとは誰アリ。

„The Lord who all our foes overcame,

World, sin and death, and hell overthrew

And Jesus is the Conqueror, his name. — C. Wesley.

諸ナシて我等の敵に勝スル。

陰府と世と死と罪とをば

あら從ムカシくしゆのじこひ

その名を耶穌と稱スルなり。

彼は如何なる生涯に依て此世と我を救ひしや、

われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらはれしや。

かれは主のまへに芽の如く、燥きたる土よりいづる樹株の如くそだちたり、

われらが見るべきうるはしき容なく、うつくしき貌はなく、われらがしたふべき艶色なし。

かれは侮られて人にしてられ、悲哀の人にして病患を知れり、また面をおほひて避ることをせらるゝ者のごとく悔られたり、われらも彼をたふとまさりき。

まことに彼はわれらの病患をおひ、我儕のかなしみを擔へり、然るにわれら思へらく、彼はせめられ、神にうたれ苦しめらるゝなりと。

彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みづから懲罰をうけてわれらに平安をあたふ、そのうたれし痍によりてわれらは癒されたり。

われらはみな羊のごとく迷ひておの／＼己が道にむかひゆけり、然るにエホバはわれら凡てのものゝ不義をかれのうへに置たまへり。

彼はくるしめらるれどもみづから謙りて目をひらかず、

屠場にひかるゝ羊羔のごとく、毛をきる者のまへにもだす羊のごとくしてその口をひらかざりき。

かれは虐待と審判とによりて取去れたり、

その代の人のうち誰かかれが活るものゝ地より絶れしことを思ひたりしや、

彼は我民のとがの爲にうたれしなり。

その墓はあしき者とともに設けられたれど、死るときは富めるものとともになれり、

かれは暴あらびを行はず、その口には虚偽いっぴなかりき。

されどエホバはかれを碎くことをよろこびて之をなやましたまへり、

斯【ふく】てかれの靈魂【そなへもの】とがの獻物【さなへもの】をなすにいたらば、彼その末を見るを得、その日は永からん、

かつエホバの悦びたまふことはかれの手によりて榮ゆべし。

かれは己【いたづき】がたましひの煩勞【いたづき】をみて心たらはん、わが義しき僕はその知識によりておほくの人を義とし、又

かれらの不義をおはん。

このゆゑに我かれをして「おおい」なるものとともに物をわかつ取らしめん、

かれは強きものとともに掠物かすものをわかつとるべし、

彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ、愆とがあるものとともに數へられたればなり、

彼はおほくの人の罪をおひ、愆ある者の爲にとりなしをなせり。

(以賽亞五十三章)

我此救に預からんと欲せば何をなすべきか

主イエス、キリストを信ぜよ然らば爾なんちおよび爾の家族も救はるべし。 (使徒行傳十六章三十一節)

何故に然るか、

それ神はその生たまへる獨子を賜ほどに世の人を愛し給へり此は凡て彼を信ずるものに亡ること無して

「かぎりなきのう」を受けしめんが爲なり。

(約翰傳三章十六節)

然り人は信仰に依てのみ義とせらるゝなり、儀式に依るにあらず、血肉に依るにあらず、位によるにあらず、學識に依るにあらず、行に依るにあらず、只十字架の辱はづかめを受けしナザレの耶穌いえすを信ずるに依るのみ。

之れ迷信の如くに聞へて眞理中の眞理なり、人の經驗中の最も確實なるものなり、我の此の福音を信ずるは聖書が斯く云ふが故にあらずして我の全性ぜんせいが之に應答すればなり、我の經驗が之を證明すればなり、歴史が之を確むればなり、自然が之を教ゆればなり、——然り信仰——信仰に依らずして人の救はるべき理由あるなし。

深い失望の暗夜にこの声がある。あなたたちの神は言われる、

慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを主の手から受けている、と。

(イザヤ書四十章一、二節)

女が自分の乳飲み子を忘れるだろうか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとえ女たちが忘れても、このわたしは、あなたを忘れない。見よ、わたしは手のひらにあなたを刻んだ。あなたの城壁は、いつもわたしの前にある。

(同四十九章十五、十六節)

しかしあなたがた、わたしの名を恐れる者には、義の太陽が昇る。その翼に癒やしがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のように跳ね回る。

天の使いが告げるのを聞け。

キリストは甦られた。

滅びるべきものよ、喜べ。

代々死にまとわれて、

その虜とりことなっていた者よ。

ああ、何という 音おとずれ だろう。あまりにも善に過ぎて、私はそれを信じることができない。

その音信を私は確かに聞く、ただ信仰が私に欠けていた」(ゲーテの『ファウスト』765)。

この救い主とは誰か。

すべての私たちの敵に勝ち、

地獄と世と死と罪とを

打ち従えた者であり、

その名をイエスと称えるのだ。(C・ウェスレー)。

彼はどのような生涯によってこの世と私を救つたのだろうか。

私たちが聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕はだれに現れたか。

彼は主の前に、ひこばえのように生え出了た。砂漠の地から出た根のように。

彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。

彼は蔑まれ、人々から避けられ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかつた。

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担つた。それなのに、私たちは思つた。神に罰せられ、

打たれ、苦しめられたのだと。

しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために碎かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、

その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。

私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行つた。しかし、主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。

彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。

屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙つている雌羊のように、彼は口を開かない。

虐げとさばきによつて、彼は取り去られた。

彼の時代の者で、だれが思つたことか。

彼が私の民の背きのゆえに打たれ、生ける者の地から絶たれたのだと。

彼の墓は、悪者どもとともに、富む者とともに、その死の時に設けられた。

彼は不法を働くが、その口に欺きはなかつたが。

しかし、彼を碎いて病を負わせることは主のみこころであつた。

彼が自分のいのちを代償のささげ物とするなら、末長く子孫を見ることができ、主のみこころは彼によつて成し遂げられる。

彼は自分のたましいの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によつて多くの人を義とし、彼らの咎を負う。

それゆえ、わたしは多くの人を彼に分け与え、

彼は強者たちを戦勝品として分かち取る。

彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられたからである。

彼は多くの人の罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。

（イザヤ書五十三章）

私がこの救いにあづかるうと望むなら、何をすべきだらうか。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒の働き十六章三十一節）

なぜそうなのか。

神は、実に、そのひとり子をお与えになつたほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネの福音書三章十六節）

然り、人は信仰によつてのみ義とされる。儀式によるのではない、血縁によるのでもない、地位によるのでもない、学識によるのでもない、行いによるのでもない、ただ十字架の辱めを受けたナザレのイエスを信じることによるのみだ。

これは迷信のように聞こえるが、真理の中の真理である。人の経験の中の最も確かなものである。私がこの福音を信じるのは、聖書がそのように言うからではなく、私の全人格がこれに応答するからだ。私の経験がこれを証明するからだ。歴史がこれを確かなものとするからだ。自然がこれを教えるからだ。——然り、信仰——信仰によらずして人が救われるべき理由は何もない。